**ドホナーニ：弦楽三重奏のためのセレナード**

名指揮者クリストフ・フォン・ドホナーニの祖父にあたるエルンスト・フォン・ドホナーニは、基本的に独墺系ロマン主義を継承したハンガリーの作曲家。1902 年に作曲したこの「セレナード」も、古典的で明朗な構成や楽想をベースに母国の民族色を織り交ぜている。5 楽章構成で、第 1 楽章「行進曲」に始まり、第 2 楽章ロマンツァの流れるように美しい旋律を経て、第 3 楽章スケルツォでは、跳ねるような半音階的主題が印象的。第 4 楽章「主題と変奏」の冒頭で与えられるハ短調の主題は、暗い美しさのなかにも崇高な情熱を感じさせる。フィナーレのロンド楽章は、楽想の多彩さを見せて、最後に再び第 1 楽章に現れた主題が奏されて曲を締めくくる。

**コダーイ：2 つのヴァイオリンとヴィオラのためのセレナード**

ドホナーニと交友のあったゾルタン・コダーイは、盟友バルトークとともにハンガリー民謡を熱心に収集・研究したことや、「コダーイ・メソッド」を確立した教育者として知られている。コダーイはハンガリー民謡に関する論文もある民俗音楽学者で、ハンガリー民謡のエキスパートであった。音楽的には、バルトークのように先鋭的な地平を開拓したわけではなかったが、今日でも取り上げられる重要な作品も残した。1919～20 年に書かれた 3 楽章からなる本曲にも彼の学問的な成果が表れており、ハンガリー農民に受け継がれてきた旋律が、瑞々しいかたちでよみがえっている。

**ドヴォルザーク：弦楽六重奏曲**

ドヴォルザーク唯一の弦楽六重奏曲は 1878 年 5 月、2 週間あまりで作曲された。編成はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが 2 本ずつ。4 楽章構成で、《スラヴ舞曲集》と同時期の作品であるため、スラヴ色も濃厚。ソナタ形式の第 1 楽章アレグロ・モデラートは明るい幸福感に満ちている。第 2 楽章はドヴォルザーク作品ではよく見られる「ドゥムカ」。ドゥムカはウクライナやボヘミア地方の哀歌で、この楽章にもメランコリックな性格がよく出ている。三部形式の第 3 楽章は、プレストの「フリアント」と記されている。フリアントはチェコの民俗舞曲の一種で、アクセントが特徴的。中間部は「スラヴ舞曲 第 1 番」と同じ旋律を用いている。ドヴォルザークはフリアントとドゥムカを組み合わせて用いることが多い。第 4 楽章のフィナーレは、主題と 6 つの変奏からなる変奏曲。主題はドヴォルザークならではの個性が光り、変奏には音色の変化が生かされている。